

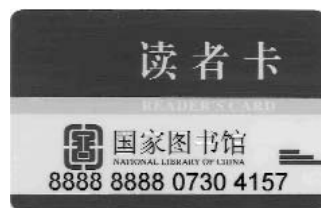
中国図書館探訪記

国家図書館篇

竹内 誠

昨年、7月から10月までの3ヶ月間、大学から中国での在外研修の機会を与えられた。その間、北京の図書館を利用することがあったので、少し紹介してみたい。かつて中国の図書館は、対応の遅さ、手続きの煩わしさ、サービスの悪さで、悪名を馳せていたことで知られる。筆者自身にも苦い経験がある。今回訪れたのは、もとの北京図書館、現、国家図書館。北京の中心部から西よりに位置する。いかめしい名前のとおり、重厚な（そのかわり趣に欠ける）建物が、北京を代表する公園、紫竹院の西隣にそびえる。蔵書数は中国最大を誇る、名実共に中国を代表する図書館である。入館するには、まず弁証処で、しかるべき手続きをしなければならない。必要なものは身分証明書（外国人はパスポート）。申込書に必要事項を書き込み、窓口へ提出する。その際、備え付のデジカメで顔写真を撮られる。なんかだか犯罪者になった気分。おまけに押金（のちに返却される）と称する保証金100元と手数料5元（約1,500円と相当高額！）を支払わされる始末。釈然としなかったが、仕方がない。あとは自分のパスワードを決め、入館証たる読者カード（写真）を首尾よく入手。意気揚揚、南側の入口へ向かい、入ろうとすると、バッグの持ち込みはだめといわれる。聞けば、入口のはす向かいにある存包処に預けるとのこと。但し、0.5元の有料。入って正面が階段で、2階が中央基蔵庫と呼ばれる一般書の貸出カウンターである。まわりにはコンピュータ端末がずらりと並び、貸出申込みはコンピュータ上で行ない、頼んだ本が来るのを、カウンターで受け取るシステム。相当の時間（本にもよるが、30分以上）待つことを覚悟すべし。国家図書館の内部は、想像以上、複雑に入り組んでいる。古今内外の書籍、雑誌、新聞、貴重書、各種媒体ごとに閲覧室が十何箇所に分かれる。

かねてから見たいと思っていた資料のありかはコンピュータ検索で、普通古籍閲覧室に所蔵



されていることが判明した。ところが、やっぱり中国だなあとということに、いきなり出くわす。南門のところにいた係員に普通古籍閲覧室の場所を尋ねたところ、東のほうを指差し、「旧館（中国語で「老館」）」と一言おっしゃる。いわれたとおり、南口を出て、（何しろ図体がデカイので、移動に結構時間がかかる）東のほうにあたる正面に行き、ウロウロするが、それらしき建物は見当たらない。再び南口に戻り、いったい普通古籍閲覧室がどこなのか、と問いただすと、係員は「北海」と、素っ気ない答え。「えっ、北海って、北海公園のことか」と聞くと、件の係員は「そうだ」と涼しい顔をしている。劇画だったら、ここで「ガン」とかいった効果音ははいるところ。なるほど、確かに北海公園はここから見て東のほうにある。北京の地理に通じていない方には、筆者の愕然とした理由がわからないかと思うので、少し説明しておこう。現在の国家図書館から北海公園に行く交通手段は、バスかタクシーの二種類。バスは少なくとも一度は乗り換えが必要で、所要時間50分くらい。タクシーでも渋滞に巻き込まれずスムーズにいった約30分（但し、現在の北京では望むべくもない）。「そんな遠いところを、さも近くにあるように、指差しでいうなよ！」と心の中で毒づきたい気持ちがわかっていただけのであろう。

なんだかんだといっても、以前に比べ、インターフェースが数段よくなったことに間違いはない。手続きさえ踏めば、かなりの稀覯本でも閲覧可能であるし、スキャナーコピーもほとんど例外なくできるようになった（本当は、これはこれで問題があるのだが…。これからさらに改善が進み、使い勝手がよくなっていくのだろうか、と思った次第である。

たけのうち まこと（教授・中国文学）